

私の学生時代

卓球一筋の生活

山下多慧子

私の同志社学生時代について、回顧致しますと、私は他の方と違いまして、何ら学生生活らしいこともせず、学生時代は卓球一途に明け暮れました。他の人達には少々オーバーな表現ですが、どれ程苦しみ、かつ泣き、どれ程うれいしい思いをしたかは、おそらく想像もつかないと思います。

勿論、私も練習のあい間を見つけては人並に青春を大いにおう歌させて頂き、数々の思い出がなつかしく浮かんで来ます。

まず、私の進んだ学校は中学(光華学園)―高校(神戸市立神戸商高)―同志社女子大学と、全国的伝統を誇る卓球王国の学校でした。女子大には全国でも上位ランクにある諸

姉が数多くおられました。いずれも地方で優勝し、将来を期待される方ばかりでした。

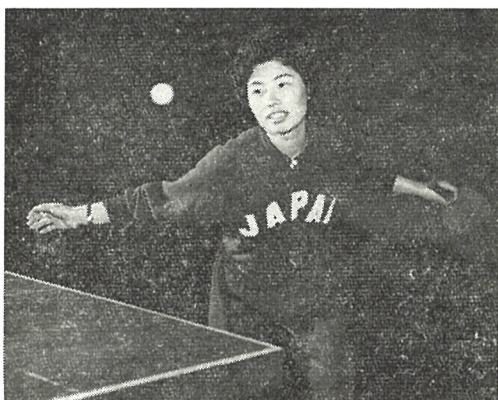
私も高校時代には、恩師沢田敏夫先生(現全国高体連理事)に言語に絶すべきハード・トレーニング法を指導して頂きました。

日紡貝塚のバレー選手の育ての親、大松監督の練習方針である一に練習二に練習の方針が如何なるスポーツにおいても相通ずるものであることがよく理解できます。私も徹底的に鍛え上げられました。その結果、全国高校団体に二年連続優勝、個人選手権も取ることができ、いよいよもって卓球生活一筋に奥深く入って行きました。これもよき指導者に恵まれたからだと思っています。その後、高校を卒業しまして友人と面白半分に入社試験を受けたのが運よくパスし、神戸の日毛本社に就職しました。

実業団で高校時代の一本調子のかくばった卓球から丸いといえますかごまかされない卓球をと色々変った人とラケットを合せました。しかし折角磨いた腕も、実業団では限度がある々と悟った私は入社半年で心をきめ、進学の準備にかかりました。仕事の合間をみ

ては進学の勉強をしたものでした。幸い周囲の人達も大いに賛成して下さり、とっても心丈夫に感じておりました。

その頃、同志社女子大学卓球部は全国制覇もしており、当時の卓球部長奥田監督や先輩の塩野さんに推められ、私にもかねがね同志社カラーにあこがれておりましたので、三十一年春季に女子大入学試験に受験し、家政学部へ入学致しました。当時部員全員が全日本のランク者なので、いい加減な練習では皆を追い越すことはもちろん一人遅れてしまうので、やるからには人に負けたくないと言う気持ちがありましたので、学校の練習だけでは充分でなく毎日登校前五時半に起床し、家の近くの神戸須磨の離宮道をランニング、家の屋上で縄飛びと柔軟体操をやりました。そして急いで登校、授業のち女子大での練習が済むとまた神戸のクラブで練習を二時間程行い、帰宅が毎日夜十時頃でした。家の者も体の心配こそすれいつも暖かく見守ってくれていたようです。当時、私は人と同じだけ練習していたのでは決して人より上に出ることはできない、だれよりも練習をし、その内容も充実したものでなくてはならない、とに角、世界大会に出場し必ず優勝するんだという大きな目



(毎日新聞社提供)

標をもっていました。そして、その目標に向かってファイトを燃やし、努力次第でそれも可能であるということを強く信じていたからこそきりぬけられたのだと思っています。そしてその年の秋、全日本学生選手権をとり、翌三十二年東京で行われた世界選手権大会への出場権を得ました。そして翌年、スエーデンの世界大会に荻村選手他七名が出場、男女とも団体優勝して卓球王国日本の名を世界に轟

ろかせました。

その後、アジア大会で女子シングルスで優勝し、檜舞台でも大分ベテランになって来ました。

私の一番感激したのは卒業後同志社OGとしてドイツのドルトムントで行われた世界大会に女子（江口、大川、山泉、私）で、史上初の完全優勝（団体、シングルス、ダブルス）し、私も山泉選手と組んでダブルスのチャンピオンとなりました時で、あの練習で泣いたことなどただなつかしく感じるだけです。

帰国後、母が病弱気味でしたので、いつもでも、飛び歩いては申し訳ないし、ぼつぼつ親孝行しようと思い卓球生活を引退しました。関係者の方々からは大いに反対され、せめてもう二年位はと説得されましたが、私の決心は固く卓球生活を満喫し、なんら未練を感じず引退してしまいました。

私の卓球生活も高校で暫をもち、女子大で花を咲かせ、卒業間もなく散ってしまいました。しかし、満開時の一番楽しい時期を同志社女子卓球部に籍をおいていた私は、色々な意味でとても肩身の広い思いをしたことが多々ありました。今でも誇らしげに感じてい

ることにこんな話がありました。父が試合見物に来ていると、隣に坐っていた中年婦人達が同志社女子大の生徒達はどこもなく他の学生と違った上品さがあり、女の子は同志社に限りますと話していたそうです。父はそれを耳にして本当に同志社に行ってよかったとつくづく感じたそうです。私の主人もそして兄も従兄も皆同志社を卒業しており、何か同志社の学生のための良さが目につきます。ここらにもクローバ精神たる同志社イズムが私にも浸透しているのでしょうか？

学生時代は暇をみつけては御所の空気を吸い、出町のおしるこを喰べたり、河原町通りを散歩した頃の想い出がなつかしく思えます。

これからの女子大生の方々も、たんに花嫁修業として女子教育を受けるだけでなく、何か花を添えるべきスポーツや趣味等一つの目標を定めて学生生活を過ごすことが、生涯思い出多い生活を噛みしめることが出来るだろうと考えます。

苦しみもあり、楽しみもあった女子大時代二度と来ない学生生活、我が青春に悔いなしの生活でした。

(旧姓 難波、昭和三年女大家政卒・卓球選手)